

## 資料室だより 55

## 聖アンブロシウスの賛歌 家入敏光著 サンパウロ

アンブロシウス(339-394)の賛歌14編の日本語訳とともにプルデンティウス(384-405)の「ペリステファノン・リベル(殉教者の勝利の栄冠について)」が所収されている。

賛歌(イムヌス)というのは聖書からの引用によらない自由な創作詩をテキストとした聖歌であるが、賛歌を歌う習慣はミラノの聖アンブロシウスから始まって瞬く間に全ラテン教会に広まり、聖句以外は許容しない厳格派の反対にも屈しなかった。

イタリアのミラノ教区では今もアンブロシウスに由来するミラノ典礼が行われているが、アンブロシウス聖歌と呼ばれた歌が、すべて聖アンブロシウス作というわけではない。聖アンブロシウスは4世紀に活躍したミラノの司教、教父、教会博士である。ギリシャ・ローマのすぐれた古典詩文を学び「司祭の能力と詩才を見事に兼ね備えた偉大な実務家」と評され、後にローマ教会に浸透した“賛歌”というジャンルの模範となるものを創作した聖人である。彼の実践の様子はアウグスチヌスの「告白」の9章に詳しい。

日本基督教団の讃美歌37番で親しまれている「夕日は沈みぬ」、また讃美歌21の212番「三一の神よ」の原曲は、アンブロシウス作のO lux beata Trinitasであるという記述が讃美歌集のなかにあるが、これは今では彼の作ではないとされている。しかしこの曲は“heilige Dreifaltigkeit”としてドイツコラールに影響を与えている。また、アンブロシウスの作として知られる“Veni Redemptor gentium”はルターの“Nun komm der Heiden Heiland”(いざ来ませ、異邦人の救い主よ)のもとになっている。アウグスチヌスを通してアンブロシウスに影響を受けていたルターが賛歌をドイツの会衆賛歌に作り替えたのである。

真作とされているのは Deus Creator omnium, Jam surgit hora tertia, Aeterna rerum conditor, Splendor paternae gloriae であると言われる。これらはミラノのトリヴルツィアーナ図書館 Biblioteca Trivulziana, M32 で見ることができる。このなかの Aeterna rerum conditor はアウグスチヌスの母モニカに忘れがたい感銘を与えたと言われる。この旋律復元は Monumento Monodica Medii Aevi, I: Hymen I で見ることができる(資料室所蔵)。この叢書の校訂者である音楽学者 B. Staebelin は「人間一人一人に語り掛け、わかりやすくも説得力のある真理を包み込む衣装である」と評している。

この本に訳出されているアンブロシウスの賛歌は以下の通り。

Aeterna rerum Conditor  
Splendor paternae gloriae  
Jam surgit hora tertia  
Deus Creator omnium  
Intende qui regis Israel

2003/11/12

Inluminans Altissimus  
Hic est dies vertus Dei  
Victor, Nabor, Felix pii  
Grantes tibi Jesu novas  
Apostolorum supparen  
Agnes beaste virginis  
Apostolorum passio  
Amore Christi nobilis  
Aeterna Christi numera

同時代のスペインのラテン詩人プルデンティウスは聖職者ではなく世俗の身分でラテン詩人となった稀有な例である。現行の聖歌集の中に残る彼の賛歌には、  
Beata martyr, Corde natus, Magi videntes, Nox et tenebrae, Quicumque Christum, Sol ecce surgit, がある。

まだ殉教者たちの記憶も生々しい時代に生きたキリスト教初代の彼らの作品は緊張感と清冽な信仰心で現代の私達をも活気づける。

(杉本ゆり)